分　科　会	中３公民	郡　市　名	岡　崎
提　案　者	岡崎市立額田中学校		酒　井　孝　康

研究題目

仲間とかかわりながら、よりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業

～「地方自治と私たち―徹底討論！額田のバス路線―」の実践を通して～

１　はじめに

岡崎市の社会科部は、研究テーマ「仲間とかかわりながら、よりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」を受け、一昨年度から授業実践を行ってきた。過年度の研究を通して得られた成果と課題は以下の通りである。

＜実践単元＞　２年生　地理的分野「中部地方―伝統産業は存続していくことができるのか―」
　　３年生　公民的分野「地方自治と私たち」

＜成果＞

・２８年度の中部地方の実践では、学級の仲間との二度のかかわり合いの場を通して、一度目は疑問を抱き追究の視点を明らかにする場として設定し、２度目は自らの考えを深め、新たな視点へ目を向ける場として重要であることが実証できた。

・２９年度の地方自治の実践では、伊賀川の防災について、子どもの疑問から問いを得ることで追究意欲が増し、主体的な追究活動と深い社会認識に至ることができた。

＜課題＞

・２８年度の中部地方の実践では、子どもの意識が連続するように単元を構成したが、教師側の誘導が強く出てしまった場面があった。主体的な社会参画への意欲を高めるために、思考の連続性を大切にした単元構成の在り方を再考する必要がある。

・２９年度の実践では、立場による多様な子どもの問いに対して、構造的な板書や、意見を深める問い返しが十分でなく、多面的・多角的な社会事象の捉えが明確にはできなかった。

これを受けて、本研究では、仲間とのかかわりを授業の核に据え、子どもの切実な問題意識から課題を追究し、社会的事象に関わるさまざまな立場の人との出会うことで、多面的・多角的に社会的事象をとらえ、よりよい社会参画をめざすことができるようになることを目指し、新しいテーマのもとで研究を進めることとした。

２　研究主題のとらえ

「仲間とかかわりながら」

「仲間」とは、共に学び合う学級の子どもたちだけでなく、学びを通してかかわる人たちもすべて含めたものを意味する。よりよい社会づくりへの参画のためには、仲間とかかわり合うことが礎となるべきであると考える。

「よりよい社会づくり」

「よりよい社会」とは、そこにかかわる人にとって幸せを感じられる社会（持続可能な社会）である。問題の解決が見えた先にあるのが「よりよい社会」であると考える。

「参画をめざす」

「よりよい社会づくり」へ「参画する」という行動化だけをめざすのではなく、行動化への意識や意欲を高めたり、きっかけを作ったりする「参画していこうとする」姿や、社会とのかかわりに「思いをはせる」姿もめざす。

３　本研究実践を通して目指す子ども像は以下のとおりである。

① 額田の公共交通に対する切実感を抱き、その問題解決のための追究活動において公共交通の維持・利用に関わる仲間や学校の仲間と積極的にかかわり合い、主体的に学ぼうとする生徒

② 公共交通に関する情報を精査し、自分の考えを再構築していく中で、多面的・多角的に公共交通の是非を考え、価値認識を深めることができる生徒

③ 仲間とのかかわり合いを通して、よりよい公共交通の在り方への参画の意欲を高める生徒

４　研究の仮説と手立て

【仮説Ⅰ】 **子どもたちの未来に関わる身近でかかわりの深い社会事象を教材として取り上げれば、追究意欲を高め、主体的に学びに取り組み、責任ある社会参画を目指す姿が見られるであろう。**
手立て①　額田地区のコミュニティバスという地域教材を取り上げる・・・社会的事象の課題を自分事としてとらえ、切実感をもって追究活動を行うことができるようにする。 **手立て②　課題に関わり合う人との出会い**…額田のコミュニティバスにはそれぞれ違った立場からかかわっている人たちがいる。バスを運行する会社、運行できるように活動する地域住民、地域住民の願いにこたえ支える行政へのインタビューや地域住民へのアンケート調査をすることで、身近な大人が額田地区の公共交通を維持できるよう努力していることに気付き、よりよい社会づくりへの参画に意欲を高められるようにする。
【仮説Ⅱ】 **社会的な見方・考え方に明示的、暗示的に着目することで多面的・多角的な社会認識を獲得することができるであろう。**
手立て③　子どもの問いが連続する単元構成を考える・・・子ども自身の疑問や、思考の変容に合わせてゲストティーチャーや資料追究の時間を設けることで、課題に携わる仲間やその思いに目を向けることで社会的な見方・考え方を働かせられるようにする。 **手立て④　教師の発問の工夫**…子ども同士のかかわり合いや、社会事象にたずさわる人とのかかわり合いの中で子どもに切り返しを行い、思考を揺さぶることで多面的・多角的な社会認識を得られるようにする。

５　教材について

本校がある額田地区は岡崎市の山間部にある。少子高齢化が進み、人口減少時代を迎えた日本。今後も財政的には厳しくなっていくことが予想される。変化の中では、支出を抑えて本当に必要な社会資本の整備維持に投資するという取捨選択が求められる。とりわけ、山間部の額田地区はその影響を強く受ける。公共サービスの面にも市場原理が持ち込まれている。

岡崎市における公共交通の代表はバスである。市民の足として、名鉄バスの運営する路線バスが市街地の全域に走り、年間６００万人以上が利用する。しかし、その利用者も近年減少しており、中には収支を割り込んでいる路線もある。そういった路線は補助金によって運行が継続されている。しかし、補助金のない区間においては乗客数の減少が廃止に直結する。額田地区もその例外ではなく、企業が行うバス路線は 2 路線であり、他の４路線は岡崎市が補助金を出すコミュニティバスである。このバスは、3 社に市が委託している。しかし、利用者の減少が続き、このまま利用者が減り続ければ廃線になってしまう危険性もある。この地域はコミュニティバス以外に公共交通機関がなく、廃線となれば交通空白地となってしまう。今後も高齢者が増えていくことが予想され、公共交通はライフラインと言っても過言ではなく、地域の存続にも直結すると考えられる。また、生徒が進学後、高校に通学するとなれば地域の課題はそのまま生徒自身の課題となり得る。だからこそ、公共交通の維持を教材化することで生徒は切実感をもって主体的に追究活動を行えるのではないかと考え、本研究実践に取り組むこととした

６　単元目標

（１）額田のバス路線について、バス会社・利用者をはじめとした地域住民・行政への追究活動を通して、利用者・納税者・企業・行政のそれぞれの立場から額田地区の公共交通と私たちの社会参画のあり方について考えていく必要があることを理解することができる。　（知識及び技能）

（２）額田のバス路線の維持についての討論を通して、収支という市場原理の視点だけでなく、地域の足としての公共サービスの視点を踏まえたうえで、公共交通のあり方について自分の考えをもつことができる。　（思考力、判断力、表現力等）

（３）地域の未来を支える主権者として地域の公共交通の維持に関わる諸問題について考えることを通して、解決に向けての関心をもつことができる。　（主体的に学習に取り組む態度）

7　単元計画

時間	学習課題	学習内容	手だて
課　外 活動	おうちの人の力を借りずに志望校にいってみよう。 なぜこんなにもバスの本数が少ないのだろう。こんなに不便なバスをだれが使うのだろう。	・インターネットを使って体験入学希望先への自宅から目的地までの通学方法を調べる。	手だて① 自分事として課題をとらえる場
1	額田地区のバスと市街地のバスは何が違うのだろう。 使う人もいないし、赤字になってしまうバス路線、 額田地区のバス路線は維持する必要があるのだろうか。	・市街地と額田地区の路線図の比較 ・市街地と額田地区の時刻表の比較	手だて③ 生徒の疑問からの資料追究
1	額田地区にバスを維持する必要があるのだろうか。 利用する人が少ないのにどうしてバスを走らせるのだろう。 儲かっているはずがないのにどうやって額田のバスを維持しているのだろう。	・額田地区にコミュニティバスが必要か必要でないかの議論を行うことで、なぜ利用者が少ないのにバス路線が維持されているのか調べる視点づくりをする。	手だて① 疑問を抱き追究の視点を明らかにする場。
3	額田地区のバスを維持する必要があるのか調べてみよう。 バス会社に関する追究 地域住民に関する追究 行政に関する追究 いろんな話を聞いて、調べたけれど調べれば調べるほど難しい問題だ。	・コミュニティバスの利用状況を理解できるようにするために、岡崎市の補助金支出額、バスの利用者数、利用頻度についての資料追究をする。 ・アンケート作成し、地域住民４００人にアンケートを行う。 ・バス会社・バス運営委員・市役所をゲストティーチャーに招き、インタビューする。	手だて③ 生徒の疑問から資料追究を行う 手だて② 地域住民へのアンケート 手だて② バス会社・バス運営委員・市役所との出会い。
1	調べたことをもとに額田地区のバスは必要か自分の意見をまとめよう。 額田のバスについて、自分の考えがまとまってきた。 他の子はどう考えているのだろう。	・調べたことをもとに事実を出し合って自分の考えの根拠を確かなものにする。 ・教師による個別の聞き取り。	手だて③ 事実を出し合うことで根拠を明確にし社会的な見方考え方を働かせる場
1	徹底討論。額田のバス路線は維持する必要があるのだろうか。 いろんな方法があるけれどお金の問題で実現できるかわからない。 バスという形ににしなくても実現可能かしっかりと考えたい。	・額田地区にコミュニティバスが必要か必要でないかの議論を行い、よりよい公共交通の在り方を考えることでこれからの額田の地域の足の在り方を考える。	手だて④ 思考を揺さぶることで多面的・多角的な社会認識を得られるようにする場
1	額田のよりよい公共交通の在り方を考えよう。 自分たちの意見を届けて住みよい額田を作るために、 自分たちの考えを反映させるためにはどのような方法があるのだろう。	・行政・バス会社・地域住民への質問の回答とこれまでの学習を根拠として地域の足としてのよりよい額田の公共交通の在り方を考える。	手だて① 自らの考えを深め、新たな視点へ目を向ける場
1	額田の地域の足を守るために、地域のバス検討委員会に意見書を出そう	・学習した内容をもとに地域の足を守るための額田のよりよい公共交通の在り方を提言する提案書を作成する。	手だて① 生徒自らが社会参画を目指す場

8　抽出生徒

Ａ・・・「バス停まで歩いて８５分かかるからバスは別にいらない。」志望高校へ体験入学に行くために公共交通を調べたときに思ったことを素直に口にした A。社会とのかかわりが薄い生徒Ａが、額田地区のよりよい公共交通の在り方について考え、自分と地域社会とのつながりを見つめ直す中で将来を担う主権者として必要な思考力、判断力、行動力を育めることを期待している。

Ｂ・・・自分の考えをはっきりと伝えることができる。友達との関わりでは、しばしばクラスメイトから「それ言い過ぎだろ。」と言われることもある。自己主張が強く、自分を受け容れてほしいが他者は受け付けない。仲間とのつながりが薄い生徒 A が家の目の前を走る額田のバス路線沿線について考え、仲間とのかかわり合うことで、少しでも他者の意見を受容した上で自分の考えを再構築することができるようにしたい。

９　授業実践

○課外活動【自分の力で志望校に行ってみよう】

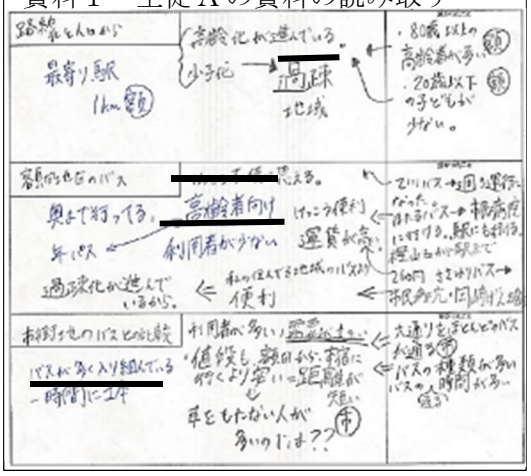
夏休み前、生徒たちは志望校への体験入学のために公共交通機関での通学方法を調べた。額田中学校は中山間部にあり、バスの本数も１時間に１本以下しかない。少ないところでは１週間に１本。生徒Ａは保護者の力を借りずに公共交通機関での通学方法を調べた。「私の家、バス停まで歩いて８５分かかるから自力で高校に行くの無理じゃん。バスなんてあっても意味ないじゃん。」とつぶやいた。

○第一次【額田地区と市街地のバスの違いは何だろう】

第一次では、自分の経験や市街地と額田地区の路線図、時刻表の資料の読み取り活動をもとに額田と市街地のバスの違いを明らかにしていった。路線やバスの本数の少なさを生徒Ａは資料の追究活動で路線図や時刻表、人口分布などの資料から、自分で市街地と額田地区を比較していった。過疎化や高齢化、それに伴う利用者の状況など地域のもつ実態に気付いていく姿が見て取れた。（資料１下線部）

生徒Ａは授業の振り返り（資料２）で「人口の差」や「雰囲気とか、ルールが関係している」と記述しており、自分の予想をまじえて額田と市街地の違いや地域の特色について関心を持ち、地域の抱える課題についての追究意欲を高め始めた。生徒Ｂは、実際に自分の家の前を通るバスの様子から本数や乗客の数に着目し、バスが必要なのか疑問に思う姿が見られた。

資料１　生徒Ａの資料の読み取り



資料２　ふりかえり

【生徒Ａ】

額田のバスと、市街地のバスでこんなにちがいが生じるのはやはり、そこにいる人の人口の差かな？と思いました。でも、このちがいは土地の雰囲気とかバスに乗る人のモラルや生まれつき持った価値判断・ルールが関係するのかな？と思いましただからそれについても調べていきたい。

【生徒Ｂ】

額田のバスと市街地のバスを比べると、額田の本数はもちろん少ないけれど、乗っている人も少ない。満員で乗っていることは見たことがないから誰が使っているんだろうと思うし、いるのかなと思う。

○第二次【額田のバス路線の維持は必要なのだろうか】

そこで第二次では、バス利用の現状をつかみ始め、利用者が少ない実態に気付いた生徒に額田地区にバスは必要か問いかけた。

本時では資料３のような話し合いが展開された。多くの生徒は実際に走るバスの姿を見たことがなかった。バスは平日にしか走らない。中学校で学ぶ生徒たちはほとんどバスを見たことがない。寮で暮らす寮生ならなおさらである。それでも病院へ行く路線であることや、Ｃ１２のように車に乗れない高齢者に思いをはせ、必要だと考える生徒が多くいた。

Ｃ１３（抽出生徒Ｂ）は実際にたまたま見た自分の家の前を通るバスの様子を考え、赤字にしかならないであろうバスをなぜ走らせるのかと疑問をもった。Ｃ１５（抽出生徒Ａ）も当初バスが必要だと思っていた。しかし、赤字であろうことや、利用者が少ないことを聞き、授業を通し、「確かにそこまで必要ではないのかな？」（資料４）と額田地区にバスが

Ｃ１２	必要。通院通学に困るしバスがあって困る人はいない。困っている人優先。
Ｃ１１	時刻表をみるとわかるけれど、ササユリバス以外は通学にしか使えない。夏山なんか一週間に一本。だから多分なくても大丈夫。
Ｃ１２	私は必要ないと思っていて、ほとんど使っていないならなくて車でもいいと思う。
Ｃ１３	家の前を走っているバスを見てもほとんど走っていないし、人も乗っていない。これで赤字にならないわけがない。
Ｃ１４	Ｃ１２につなげて、ほとんど使わないかもしれないけれど、なくなって困る人がいると思うから必要だと思う。
Ｔ	なくなって困る人ってだれなの？
Ｃ１５	お年寄り。車に乗れなくなった人ととかはバスがないと困る。
Ｔ	じゃあ、実際に必要としている人がいるかどうかや儲かっているかってどうしたらわかるかなぁ。
Ｃ	バス会社とか地域の人に聞いたら分かると思う。
Ｔ	どんなことを聞いてみたいの？
Ｃ	誰が赤字になるバスを走らせているのかとか、誰が乗っているのか知りたい。

資料3　授業記録（額田のバスの維持は必要か）

必要なのか問題意識を高める様子が見られるようになった。また、生徒Ｂも「バスは必要な人もいると思うけれど、赤字にしかならないバスを誰が走らせているんだろう」とバス路線の運行に疑問をもった。そこで、「額田地区にバスを維持する必要があるのだろうか」という単元を貫く課題を設定し、追究活動を行うことにした。追究活動では生徒たちに「実際に必要としている人がいるか、儲かっているかってどうしたらわかるか。」と問いかけたところ実際に利用する地域住民と運行するバス会社にインタビューを行ってみたいという言葉があったため、実際に会って話が聞けるよう場を設けて生徒の疑問の解決に向けての追究活動を始めた。

資料４　ふりかえり

【生徒Ａ】

今日の学習で最初はバスが必要だと思っていたけれど、Ｃ１１やＣ１３の意見を聞いて確かにそこまで必要ないのかなと思いました。

【生徒Ｂ】

バスは必要な人もいると思うけれど、赤字にしかならないバスを誰が走らせているんだろうと思った。それに、あまり乗っていないのに本当にバスが必要なのか疑問に思った。

○第三次・第四次・第五次【聞き取り調査】

本時では、コミュニティバスを取り巻く現状を理解し、そこに関わる人の想いに触れるため、【バス会社】【地域住民】【市役所の地域創生課】を招いての聞き取り調査を行った。その中で、毎時間のふりかえりを数値化し、必要０～５不必要で表すことで変化を分かりやすくした。

資料５　バス会社インタビュー　ふりかえり

【生徒Ａ】価値判断０

私は今の他人事とは思えないような話を聞いて「負のスパイラル」を断ち切るために、私もバスをもっと利用していこうと思いました。だから、額田を守るためにバスは必要だなと思いました。

【生徒Ｂ】価値判断２

バスを一本走らせるためにはたくさんの資金がいることが分かった。必要な人には本当に必要なものなんだとわかった。でも、赤字になるかもしれないバスを誰が走らせようとしているのか気になった。

バス会社の聞き取りでは、収支状況、利用者数についての実態、そして額田地区のバス路線が補助金で運営されていることなどの市場原理について話を聞き、インタビューを行った。生徒Ａはインタビューをする中で乗客が少ないと利益がさらに減り、運行できなくなることに注目し、ふりかえりで「他人事とは思えないような」（資料５）と、地域の抱える課題について自分事として捉え始め、バスが必要だと考え０とした。また、生徒Ｂは「赤字になるかもしれないバスを誰が走らせようとしているのか気になった。」(資料５)と２としてバスは必要だと考え、運行資金について疑問をもった。生徒にその点を聞くと「額田の人にアンケートをしてみたい」という言葉があり、それを受けて生徒が地域の家庭に訪問してアンケート調査を行い、バス路線を利用する人と、しない人との意識のちがいや利用状況について調べ、「コミュニティバス」を立ち上げた地域住民にインタビューをすることとなった。生徒Ａはその中で地域に住む人の「バス路線を残したい」という想いに目を向け、ライフラインとしてのバス路線にこだわってバスが必要だという思いをより強めていった。しかし、中には不要と答えた人もいたことに着目し、その意見も尊重したいという考えをもち価値判断も１と揺れ動いた。（資料６）

資料６　地域住民への聞き取りふりかえり

【生徒Ａ】価値判断１

額田地区の人たちの意見を聞いて、やはり通院・通学などのライフラインの中にバスが加わっている人が多いと分かって、改めて人々の生命線を絶たないようにバスは必要だと強く思いました。でも、不要と答えた人もいたので彼らの意見も聞いてみたいと思いました。

【生徒Ｂ】価値判断３

額田の人の８０％がバスを必要と言っているけれど、ほとんどの人が乗っていない。自分の家の前を走るバスもほとんど誰も乗っていないことがあるし、補助金っていうけれど市役所はどう考えているか気になる。

不要とした人もいることに着目した生徒Ａ。生徒Ｂは地域住民へアンケートで８０％の人が必要と言答えたがバスを利用していない現状を考え、補助金を出している市役所の存在に目を向けた。（資料７）生徒Ｂの気付きから公共サービスとしてのバス路線という視点にも目を向けられるように市役所の地域創生課の人を招き、補助金の財源や運行状況、バスの利用状況についての聞き取りを行った。その中で、生徒Ａは、額田地区だけで岡崎市の補助金の４分の１を使っていることに気付き、必要だと思って

いた価値判断も３となり不必要に考えが揺らいでいった。（資料７）しかし、少数の地域ために行政が様々な工夫をしていることにも目を向け、額田地区のバスの維持についてもっと知りたいという思いを強めた。（資料７）また、生徒Ｂも使われている補助金の額に対して乗客の数が少ないことを再確認し、「使わないのにほしいというのは無責任だ」と維持の必要がない立場の意見を強め、価値判断も５に移っていった。（資料７）

資料７　市役所への聞き取りふりかえり

【生徒Ａ】価値判断３

市内のバスはかなりの補助金がかかっていることを知って、大型バスじゃなくても少数を送迎する軽自動車などでもいいんじゃないかなと思いました。市の職員さんが地域の足を守るために様々な工夫をしていることが分かったのでもっと考えたいです。

【生徒Ｂ】価値判断５

額田のバスは乗る人数のわりに、かかっているお金が多い。使わないのにほしいというのはやっぱり無責任だから今のままだったら維持する必要はないと思う。

○第六次【額田のバス路線についてこれまで学んだことを出し合おう】

第六次では、生徒がこれまでの自分の学びを見つめ直すために、学習した事実を出し合い、事実の共通理解を図ると共に、自分の意見の根拠を確かにできるよう教師が一人ひとり聞き取りを行った。その中で生徒Ｂは利用者とそれに掛けられている費用の高さに目を向け（資料８）必要ないという５の立場をとった。また生徒Ａはこれまでの自分の学びを見つめ直し、自分の考えの根拠を強め、みんなの意見が知りたいという思いをもった。（資料８）そこで、第七次は、生徒Ａのみんなはどう思うか知りたいという思いからもう一度、「額田のバスは維持する必要があるのだろうか」を設定した。

資料８　第六次のふりかえり

【生徒Ａ】価値判断４

今日、これまで学んできたことを出し合って、改めてバス路線の維持について根拠を深められたと思うので私は必要ないと思うけど、みんなはどうなのか知りたいです。

【生徒Ｂ】価値判断５

今日改めて考えても、利用したいといってもそれで使わなければ無責任だし、９０００万円も使うならもっと他に良い方法があるはず。

	人物概要	学習の内容
バス会社	・コミュニティバスを運行する会社の課長 ・兄弟が額田に住んでいる。	・現在のバスは1台2000万円～3000万円。・経費の70%が人件費→人を増やそうにも元が取れない。 ・運賃収入は経費の約6%・行政の補助なしでは運行できない。 ・人が減る→利用者が減る→運賃収入が減る→維持できない ・人が減る→町が廃れる→過疎化が進む。・一定量利用のないバス路線は国も見捨てる。 ・利用者が少なくても同じ人が何度も乗っている→高齢者や高校生などの交通弱者には必要なもの ・ささゆりバスだけで補助金が1500万円。・定期券利用者は20名
バス運営委員	・バス路線の喪失による集落の過疎化の加速、限界集落化を懸念している ・ササユリバス委員会を立ち上げ、行政に支援維持を働きかけている	・ササユリバス(コミュニティバス)の収支率は 6%・1便に乗る平均利用者数は4～5人。 ・バス路線の喪失による過疎化の加速化、集落の限界集落課を懸念している。 ・一人で2回乗ったら 2 人とカウントされる。 ・利用者を増加のために地域を巡るバスツアーや老人クラブのバスツアーなどで利用促進を図る。 ・バス利用を促進するために、高校生が通学に使える時間に運行を打診。路線の維持を図っている。 ・爆発的に額田の人口が増えることはなくても、故郷を維持していきたい。
地域住民	・地域住民400人にアンケート調査。	・額田の地域住民の80%はバス路線を維持してほしいと願っている。 ・バス路線を残してほしいと言っている人の80%はバスを利用していない。 ・バスの利用目的のうちの68%は通院。20%は通学。 ・バスの利用者のうち60%が60代以上。
地域創生課	・市役所の地域創生課 ・岡崎市のコミュニティバス路線の運営を担当	・岡崎市全体のバス路線への補助金の額は 3 億 3000 万円。 ・額田地区へのバス路線への補助金の額は 9000 万円 ・岡崎市の人口は約39万人、額田地区の人口は 9000 人。 ・補助金のもとは税金で賄われている。税金は生徒たちの父親、母親が払っている。 ・税金には限りがあり、湯水のように使うわけにはいかない。だから、使わないのに将来的に残してほしいからというのは通用しない。今必要だから補助金も出すことができる。 ・実際に地域の人が活動している実績を調査している。3 年に 1 度の運行の見直しを図っている。

資料9　額田のバス路線についての事実

○第七次【徹底討論。額田のバス路線は維持する必要があるのだろうか】

「徹底討論。額田のバス路線は維持する必要があるのだろうか」は、生徒Ａが前時のふりかえりを話し、討論がスタートした。クラスの３８人のうちバスの維持が必要であると考える生徒が３０名、必要でないが８名、多くの生徒が利用者の目線から必要だと考えており、利用者の視点を切り口にして討論は進んでいった。Ｃ６、Ｃ７、Ｃ８と実際に利用する人の立場に立つ意見が続き、利用する人の想いや地域の足としてのバスの側面が際立った。Ｃ１２の「一人８０万円で多すぎる。」という発言で、補助金が

税金だという視点に目が向き利用者の地域の足と、それを支える行政という視点が明確ったことで、生徒の意見は焦点化されていった。生徒Ａ（Ｃ１４）も「空気を乗せてバスが走っているだけ」と討論に加わり、利用率の低さに着目して、税金のよりよい使い道について考えていった。

Ｃ１５は、利用しない額田の人の意見に目が向け、「無責任」だと税金を使う以上責任が必要だという考えを広めた。その中で地域住民の取り組みへと目が向き、利用せずに必要だと考える額田に住む人の在り方について目が向けられていった。

そこで、さらに自分事として考えることができるようにするため、T1、T2 で「華族だったらどうか」と「税を払う立場だったら」と切り返した。するとＣ２８、Ｃ２９、Ｃ３４にあるように具体的な代替策を上げながら維持するための折衷案を提案する姿が生み出された。しかし、生徒の意見が実現可能か判断するための情報が少なく、第７次では明確な答えを出すには至らなかった。（資料１２下線部）

そのため、インタビューを行った【バス会社】【地域住民】【市役所の地域創生課】に質問状を送り、回答してもらう形をとった。第七次のふりかえり（資料１２）で生徒Ａは最後までバスについては必要がないと考えていたが　級友の考えを踏まえて自分の考えを見つめ直した。その中で、「自分の家族が必要としていたら」と課題に対する切実感をより高め、自分の考えるべき地域の課題としてかかわっていこうとする様子が表れた。

Ｃ５　必要ある。利用してる人が困るし、利用していない人もアンケートで必要と言っている人が２００人以上いる。
C6　必要あるで、通院や通学、お年寄りが増えているので残しておくべき。
C7　C6さんにつなげて、通院通学、足となるためにバスがある。
C8　必要。通院通学に困るしバスがあって困る人はいない。困っている人優先。
・
・
C１２　私は必要ないで、ささゆりバスには１６００万円も補助金が使われている。定期券利用者で割ると一人８０万円。で多すぎる。補助券はおとうさんが払っている税金。
C１３　僕は必要だと思って杉浦さんの話を聞いて医者に行くのに必要だから作った。必要だから今も走っている。
C１４　私は必要ないと思っていて、空気を乗せてバスが走っているだけ、他のことに税金を使えば。
(A)
C１５　私は必要ないと思っていて、利用しないのに必要と答えている。維持のために何もしてないのに無責任。
(B)
T　無責任ていったけれど本当に何もしていないのかな。自分の家族でも同じことがいえるかな。
C１６　ささゆりバスは、老人会の打ち上げでバスを使っているから何もしていないわけではないと思う。
・
・
C２４　アンケートで２割は使っている。僕たちの税金なので何もしていないわけではなと思う。
C２５　黒字目的ではない、市役所の人も赤字と知っている。支援のために走らせている。
C２６　僕は必要ではないで、もともと税金は大人の働いたお金。乗るかもわからないバスにお金を必要はない。お金をどぶに捨てているようなもの。
C２７　C２６に対して、必要派の人が通院・通学のためだと言っているから必要。高齢者の命が危ない。
T１　維持する必要がないと言っている子達は、利用してる人は病院に行けなくてもいいってこと？自分の家族だったらどう？
C２８　困る人のために、バスではなく軽自動車にすれば維持費も安くなると思う。
(A)
C２９　バスではなく小型自動車にしたらいいと思う。バスがあるからバスに乗る。困る人の足なら別の方法でもいい。
・
T２　じゃあ、必要だとっている子たちは自分が税金を払う立場になったらどう思う。
C３４　それは嫌です。乗らないのにそれだけ出すのは嫌だ。

資料11　授業記録（額田のバスの維持は必要か）

資料１２　第七次ふりかえり

【生徒Ａ】

やっぱり最後までバスの維持は必要ないとおもったけど、C６、C11 がこれから必要とする人が増えると言っていて私の家族が必要としている立場でも反対できるのか考えされられました。

【生徒Ｂ】

今日はバスではなくてもタクシーや普通の車でもいいと思ったけれど、お金の問題で実現できるかわからないところが多かったし、バスがいらないという理由にお金に関しても意見が多くあったからしっかりと考えたい。

○第八次・第九次【額田のよりよい公共交通の在り方を考えよう】

第八次では、生徒の質問の回答をもとに、よりよい額田の公共交通の在り方について話し合った。前時までの学習を生かしてＣ１７は補助金は税金から拠出されていることにこだわり、今の額田のバスの利用状況を考えて地域の足を残すための方法を考えていった。Ｃ１９では生徒Ａも乗客がいなくても運行しなければいけないバスの現状を考えて、補助金を無駄なく利用し、地域の足を守るための方法としてタクシーの利用を提案した。既存のタクシーを利用した乗り合わせや補助券の運用に着目し、地域の足を残す方法を考えた。第九次では地域創生課の方より、生徒の案が実現可能かどうかは地域のバス検

討委員会に提案したうえで検討するとの回答だったため、生徒はバス検討委員会や地域住民の意見を踏まえて自分たちの案が実現可能かどうか検討してもらうため自分の考える額田のより良い公共交通を実現するための案を意見書としてまとめ、地域のバス検討委員会へ意見書を提出した。（資料１３）

資料１３　第八次ふりかえり

【生徒Ａ】

結局バスでもタクシーでもお金は必要。大切なのは無駄なお金を減らして地域の足も守ることだからもともとあるタクシー会社を使って、使う時だけ人件費いる減る乗り合いタクシーが良いと思う。

【生徒Ｂ】

利用者が少ないとバスだと維持するだけでお金がかかってしまう。空気だけ乗せるバスを走らせるより、地域の足として乗り合いタクシーとかにした方が額田の人にとってはいいと思う。

C17　バスの維持にたくさんの補助金がかかっているし、元が税金の９０００万円も額田だけに使い続けるのはたぶん無理だし、このままバスの利用が少なければどんどんバスはなくなってしまうと思う。ここから一気に利用者は増えないと思うから、前言っていたみたいに小さいバスや乗り合いタクシーの形にして地域の足は守っていきたい。

C18 (B)　タクシーにするにしてもお金がかかりすぎる。。額中の辺から本宿まで行くのに３０００円以上かかるから今のバスの維持をしていくほうがいい。

C19　バスは乗っていても乗っていなくても走らせないといけない。だから、空気を運んでいるみたいになってしまう。バスじゃなくて必要な時に呼べる方法の方が補助金も無駄にならない。今バスに使っている補助金をタクシーを呼ぶのに使えば地域の足もなくならない。

・

C22 (A)　バスにすると使っていなくても結局見えないところでお金が必要になってどぶに捨てているようになっちゃうから、今あるものを使ってタクシーの乗り合わせとか補助券とかにした方が今後も長く地域の足が残せる気がする。

C23　C22 に賛成で、タクシーは一人で使うとめっちゃお金がかかるけど、乗り合わせにしたら安くなる。それにバス会社の人も言っていたけれど、ワゴンタイプのやつもあるから１０人くらい乗るなら今バスを使っている人の数を考えても余裕で足りる。

C24　地域の足を残すってなると路線バスじゃなくて、乗り合いタクシーでもいいと思う。でも、市役所の人も言っていたけれど、バスの検討委員会や地域の人の考えも踏まえて考えないと額田のためにはならない。

・

T　じゃあ、自分たちの思いをバス検討委員会を通して伝えてみようか。

資料18　授業記録（額田のより良い公共交通の在り方を考えよう）

資料１４　生徒Ａのバス検討委員会への生徒の意見書

地域の足を守るためにコミュニティバスの乗り合いタクシー化を提案します。今のコミュニティバスの運行方法では利用者に１人に対して８０万円も補助金として税金が使われていることになります。バスの運行で一番大きなお金は人件費です。乗っても乗らなくてもバスは走らないといけないことを考えると、タクシー会社のワゴン車を使って必要なときだけ呼べる乗り合いタクシーに補助金を出した方が無駄なく税金も使えるし、運転手を待機させたりするお金も減るので、使う時だけ人件費がいる乗り合いタクシーが良いと思います。今後の額田の地域の足を守り続けることを考えるとコミュニティバスから乗り合いタクシーに地域の足の在り方を変えていくことを提案します。

10　成果と課題

【仮説Ⅰ】について

手立て①では、近い未来に生徒自身も通学に使うであろう額田地区のコミュニティバスという地域教材を取り上げたことで課題を自分にかかわることととらえ生徒は追究意欲を高めていった。手立て②では、生徒の思考の変容に合わせてバスの運営会社、バスの維持活動をする地域住民、地域住民の願いにこたえ支える行政へのインタビューをしたことで額田地区の公共交通を維持できるよう努力している人たちがいることに気付き、生徒自身がバスの維持活動という形を通してに社会に参画していこうという姿が見られた。

【仮説Ⅱ】について

手立て③では、生徒自身の疑問や、思考の変容に合わせてバスの運営会社や地域住民、市役所をゲストティーチャーに招き、地域住民のアンケート資料の追究の時間を設けることで、要望と現実の矛盾と生徒は課題にかかわる仲間の思いに目を向け、社会的なものの見方を増やしていった。手立て④では、住民のニーズと費用対効果の対立に目を向けた生徒に対し、自分の家族だったらどうかという問い返しをすることで思考を揺さぶり、多面的・多角的な社会認識を得られるようにする。

11　おわりに

本実践を通して、生徒は地域の問題に切実感を抱き、主体的に追究活動に取り組んだ。その中で、級友や地域住民、地域の課題にかかわる人たちと交流する中で問題を自分の事として捉え、思考を深めていくことができたことが成果として挙げられる。また、教師が、意図的に問い返しをすることで地域住民の思いに偏重していた考えを揺さぶり、公的資金の使い方という視点をもたせることができた。また、補助金が税金だということに着目した生徒に対しては、自分の家族でも合理的な判断のみで維持が不必要か揺さぶることで地域の抱える課題が自分の事として考えるきっかけとなった。簡単に解決が難しい地域の抱える課題ついて、多数と少数意見の尊重を手掛かりにして解決に迫れたことで、生徒が地方自治への理解を深め自らの社会へ参画への思いを深めることができたと考えられる。